

私の研究録

入口 豊¹⁾

Research Papers of Yutaka IRIGUCHI

Yutaka IRIGUCHI

Key words : Research papers, Comparative sport pedagogy, Teaching physical education, Outdoor play, Football

キーワード : 研究録, 比較スポーツ教育学, 体育科教育, 屋外遊び, サッカー

I. はじめに

私が大阪教育大学理事・副学長職を退任後、2017年10月付で本学学長に就任して早や3年が経過した。思いもよらず、2018年度のアカデミックアワーで私の研究歴を発表する機会を頂き、自らの約40年間に及ぶ大学教員生活の研究・教育を顧みる絶好の機会を頂いた。その報告を兼ねて、私自身の著作物（著書、翻訳書、論文、報告書等公刊済のもの）を年次別に並べ、主に下記9部門に分類して、関連論文の通し番号を分野別に分類整理することを試みた。

巻末には、私の研究のメインとなった「体育・スポーツの国際比較研究」に関する内容を端的にまとめた「体育科教育」誌掲載(2014年9月号 PP.10-13.)の「比較体育科教育学への招待」の元原稿を掲載する。これまでの研究姿勢の一端はご理解頂けると思う。

II. 主な研究内容

1. 児童の屋外遊びに関する実証的研究

学部学生当時から着手していた大阪府下児童の実態調査に基づく「屋外遊びの実証的研究」は、高橋健夫先生（奈良教育大学当時）、丹羽劭昭先生（奈良女子大学当時）を中心に大阪府教育委員会の協力を得て実施した小学

校高学年児童の屋外遊びの実態を分析したものである。1973年第24回日本体育学会大会（於中京大学）において、初めて筆頭発表者（入口 豊（大阪教育大学）・高橋健夫（奈良教育大学）・丹羽劭昭（奈良女子大学）・白銀茂夫（大阪府教育委員会）「児童の屋外遊戯時間に作用する社会的要因（第2報）」として口頭発表したことが研究者の出発点となった。その後も同様の調査研究に継続的に取り組み、研究代表者として1984-1985年、1985-1986年の2回連続で若手研究（A）として科学研究費補助金に採択されている。：[論文] 5・6・7・11・12・42・78・83

2. 体育・スポーツの国際比較研究

1974年、東京教育大学（現筑波大学）大学院体育原論研究室（浅田隆夫教授、片岡暁夫助教授当時）に進学後に取り組んだ修士論文のテーマは、「1970年代におけるイギリスの公立中等学校体育カリキュラムに関する研究」であった。そして、これを機に取り組むことになったのが、その後のメインの研究分野になる体育・スポーツの国際比較研究である。その内容は、下記6項目に分類できる。

(1) 1970年代イギリスの公立中等学校体育カリキュラムに関する研究：

[論文] 1・10

1) びわこ成蹊スポーツ大学 学長

- [著書] 2・4・8
- (2) 比較教育学方法論の体育・スポーツへの応用に関する研究：
[論文] 8・16・24・112
[著書] 10
- (3) 学校体育カリキュラムの国際比較研究：
[論文] 4・15・32・35・36・39・49・53・66・68・70
[著書] 2・4・5・8
[訳書] 5
- (4) 大学・大学院レベルの体育教員養成制度の国際比較研究：
[論文] 49・51・62・63・64・72・74・75・77・85・86
- (5) NCAA（全米大学競技スポーツ協会）と大学スポーツに関する研究：
[論文] 48・50・52・90・114
[訳書] 1
- (6) サッカーを中心とする各種競技スポーツ種目の国際比較研究：
[論文] 38・41・44・54・55・60・69・71・76・81・102・103・105・110・111・114
- 3. スポーツの哲学的・比較文化論的研究**
スポーツの哲学的研究の内、特に「スポーツ倫理」の観点から
- (1) オリンピックの「ドーピング問題」に関する研究：
[著書] 6・7
[訳書] 1
- (2) 「サッカー・フーリガニズム」と暴力・暴動に関する研究：
[論文] 28・29・34
- (3) その他の哲学的研究：
[訳書] 2
- (4) ドナルド・ショーンの反省的实践家論とコーチングに関する研究：
[論文] 106・108
- (5) 比較文化論的研究：
[論文] 56・61・67

4. 体育科教育・授業実践・体育教師・スポーツ教育学に関する研究

- (1) 体育科教育に関する研究：
[論文] 9・13・22・26・45
[著書] 1・9・11
[訳書] 3・4
- (2) 体育科授業実践研究：
[論文] 19・25・27・30・31・95・96・99・100
- (3) 体育教師に関する研究：
[論文] 26・90・93・94
- (4) スポーツ教育学に関する研究：
[論文] 46・47
[著書] 10

5. 女性とスポーツ・ジェンダー問題・女性体育教師に関する研究

競技スポーツにおけるジェンダー問題、女性とスポーツ、女性体育教師を巡る諸問題についての研究。（「日本スポーツとジェンダー学会」会員）

- (1) 女性スポーツの日米比較研究：
[論文] 37・38・41・43・44・60
- (2) 女子サッカーの現状と課題に関する研究：
[論文] 55・65・73・97・98・101
- (3) 女性の職業としての体育教師に関する研究：
[論文] 90・93・94

6. 各種サッカー競技に関する研究（Jクラブ経営・フットサル・視覚障がい者（ブラインド）サッカー・大学サッカー選手）

- (1) サッカーJクラブ経営に関する事例的研究：
[論文] 107・109
- (2) フットサル普及に関する研究：
[論文] 87・89・92
- (3) 視覚障がい者（ブラインド）サッカーに関する研究：
[論文] 79・82
- (4) 大学サッカー選手に関する実証的研究：

[論文] 14・21・23・80・84・88

7. 児童・生徒の体力・運動能力や地域・生涯スポーツに関する研究

- (1) 児童・生徒の体力・運動能力に関する実証的研究：

[論文] 17・20・57・58・59

- (2) 地域スポーツ・生涯スポーツに関する研究：

[論文] 2・3・4

[著書] 3・12

8. 2007年日本体育協会「第10回秩父宮記念スポーツ医・科学賞」受賞研究

健康づくりと行動変容プログラム研究開発グループ(代表:早稲田大学 竹中晃二教授)による「身体活動・運動アドヒアランス強化に関する行動科学的研究」:

[論文] 57・58・59

9. 教育雑誌「教育PRO」連載コラム

2015年9月から2020年10月まで計29回連載. 現在も継続中.

Ⅲ. [著書] (分担執筆)

- 辻野 昭・松岡 弘編(1980) 保健体育科教育の理論と展開 第一法規:東京,
入口 豊「水泳」(第2章2節):129-135.
- 近藤英男編(1981) スポーツの文化論的探究 タイムス:大阪,
入口 豊「イギリスの体育カリキュラム改革-70年代, 中等学校の体育を中心に-」:123-145.
- 大教スポーツ研究会編(1982) スポーツと人間 学術図書出版社:東京,
入口 豊「スポーツと社会」(第4章2・3):199-221.
- 丹羽劭昭・辻野昭編(1984) スポーツと教育の展開 第一法規:東京,
入口 豊「伝統的な教科体育の改革をすすめるイギリス」(第1章6節):20-29.

- 井上雍雄編(1989) 話題源 英語(下巻) 東京法令出版:東京,
入口 豊「Physical Education」:853.

- 体育原理専門分科会編(1992) スポーツの倫理 不昧堂出版:東京,
入口 豊「スポーツとドーピング」(第2章3):100-118.

- 河本洋子編(1993) 健康生活と体育 名研図書:東京,
入口 豊「ドーピング問題とスポーツの倫理」(第4章10):159-167.

- 竹田清彦・高橋健夫・岡出美則編著(1997) 体育科教育学の探求:体育授業づくりの基礎理論 大修館書店:東京,
入口 豊「イギリスにおける運動特性の考え方」(第3章3):70-102.

- 中村敏雄編(1997) 戦後体育実践論 第2巻:独自性の追求 創文企画:東京,
入口 豊「体力づくりの実践」(第2章3):93-101.

- 近藤英男・稲垣正浩・高橋健夫編(2000) 新世紀スポーツ文化論(体育学論叢4) タイムス:大阪,
入口 豊「スポーツ科学・スポーツ教育学の発展と比較スポーツ教育学(Comparative Sport Education)の課題」:123-145.

- 高橋健夫・岡出美則編著(2002) 体育科教育学入門,大修館書店:東京,
入口 豊「体育科の教育課程論」(第1章7):57-64.

- 岡出美則・友添秀則編(2005) 教養としての体育原理,大修館書店:東京,
入口 豊「みんなのスポーツ」(第3部6):116-119.

- 近藤英男・稲垣正浩・高橋健夫編(2000) 新世紀スポーツ文化論(体育学論叢4) タイムス:大阪,
入口 豊「スポーツ科学・スポーツ教育学の発展と比較スポーツ教育学(Comparative Sport Education)の課題」:123-145.

- 高橋健夫・岡出美則編著(2002) 体育科教育学入門,大修館書店:東京,
入口 豊「体育科の教育課程論」(第1章7):57-64.

- 岡出美則・友添秀則編(2005) 教養としての体育原理,大修館書店:東京,
入口 豊「みんなのスポーツ」(第3部6):116-119.

- 近藤英男・稲垣正浩・高橋健夫編(2000) 新世紀スポーツ文化論(体育学論叢4) タイムス:大阪,
入口 豊「スポーツ科学・スポーツ教育学の発展と比較スポーツ教育学(Comparative Sport Education)の課題」:123-145.

- 高橋健夫・岡出美則編著(2002) 体育科教育学入門,大修館書店:東京,
入口 豊「体育科の教育課程論」(第1章7):57-64.

- 岡出美則・友添秀則編(2005) 教養としての体育原理,大修館書店:東京,
入口 豊「みんなのスポーツ」(第3部6):116-119.

- 近藤英男・稲垣正浩・高橋健夫編(2000) 新世紀スポーツ文化論(体育学論叢4) タイムス:大阪,
入口 豊「スポーツ科学・スポーツ教育学の発展と比較スポーツ教育学(Comparative Sport Education)の課題」:123-145.

- 高橋健夫・岡出美則編著(2002) 体育科教育学入門,大修館書店:東京,
入口 豊「体育科の教育課程論」(第1章7):57-64.

- 岡出美則・友添秀則編(2005) 教養としての体育原理,大修館書店:東京,
入口 豊「みんなのスポーツ」(第3部6):116-119.

Ⅳ. [翻訳書] (分担訳・共訳)

- J. スコット:片岡暁夫監訳(1976) 現代スポーツへの警告. 不昧堂出版:東京
入口 豊訳;第2章「混乱の渦中にある大学対抗スポーツ」:28-41., 第5章「アメリカ

- カン・フットボールと教育」：78-99., 第12章「スポーツと薬品乱用」：198-210., 第15章「スポーツと社会」：240-251.
2. M. ノヴァク：浅田隆夫校閲・片岡暁夫監訳（1979）スポーツその歓喜, 不昧堂出版：東京, 入口 豊訳；第7章「聖なる空間, 聖なる時間」：142-157.
3. J.E. ケーン：梅本二郎・川口貢監訳（1987）ヒューマン・ムーブメントと体育, 不昧堂出版：東京, 入口 豊訳；第4章「コミュニケーションの様式としてのムーブメントとその指導」：42-49.
4. D. シーデントップ：高橋健夫他訳（1988）体育の教授技術. 大修館書店：東京, 入口 豊訳；第10章「学習指導の実践」：231-266.
5. 米国身体適性・スポーツ大統領諮問委員会：高橋健夫・入口 豊・岡出美則共訳（1989）米国1990年の身体適性と運動に関する諸目標（中間報告）, 文部省体育局委託研究（非売）：1-79.
- 研究－屋外遊戯時間やあそびの志向態度に及ぼす要因の分析－, 奈良教育大学保健体育学研究室, スポーツ教育の理論と実践に関する基礎的研究：39-58.
6. 入口 豊・高橋健夫・内山憲一（1984）大学生のスポーツ参加を規定する要因, スポーツ教育学研究 3-2：1-12.
7. 丹羽劭昭・高橋健夫・入口 豊・長沢邦子（1984）児童の屋外遊び時間を規定する要因の検討－児童の遊びや生活に対する母親の態度を中心に－, スポーツ教育学研究 3-2：29-47.
8. 入口 豊・柏原健三・大村昭洋（1984）比較体育・スポーツ学に関する研究－方法論の問題を中心に－, 大阪教育大学紀要 第IV部門33-1：75-91.
9. 高橋健夫・入口 豊（1984）個別化・個性化をめざす体育授業, 体育科教育 大修館書店：15-18.
10. 入口 豊（1985）戦後イギリス学校体育に関する一考察－特に, 1944年から60年代前半について－, 大阪教育大学紀要 第IV部門 34-2：181-192.

V. [論 文]

1. 入口 豊（1977）英国中等学校における体育理念－70年代を中心に－, 東京教育大学大学院体育学研究科体育学修士論文：1-166.
2. 柏原健三・入口 豊（1978）地域住民のスポーツ意識に関する一考察（第1報）－池田市の実態を中心に－, 大阪教育大学紀要 第IV部門27-1・2：81-91.
3. 柏原健三・入口 豊・大畑隆司（1979）地域住民のスポーツ意識に関する一考察（第2報）－校區別にみた池田市の実態－, 大阪教育大学紀要 第IV部門 28-1：37-46.
4. 入口 豊・島崎 仁（1981）ファミリーユニットでのスポーツ行動の現状と今後の方向について－大垣市での事例研究－, 大阪教育大学紀要 第IV部門 28-1・2：37-48.
5. 高橋健夫・丹羽劭昭・入口 豊・白銀茂夫・長沢邦子（1982）児童の屋外遊戯に関する
11. 丹羽劭昭・高橋健夫・入口 豊・長沢邦子（1986）児童の屋外遊び時間を規定する要因の検討－大阪府下5・6年生児童の経年比較を中心に－, スポーツ教育学研究 6-1：1-12.
12. 入口 豊・楠本正輝（1987）大阪市における児童の屋外遊びに関する調査研究, 大阪教育大学紀要 第IV部門36-1：43-55.
13. 入口 豊（1988）ボール運動（ゲーム）における基礎・基本とは何か－サッカーを中心に－, 季刊体育と保健 タイムス：2-7.
14. 朝井 均・梅田美津子・山下恵美・入口 豊 他2名（1989）サッカー部・クラブ検診におけるレフプロトンシステムの応用, 臨床検査機器・試薬12-2：373-379.
15. 入口 豊（1989）E.O.オジェム：「体育」という名称は今も有効か, 学校体育, 42-

- 9 : 126-132.
16. 入口 豊 (1989) 比較体育・スポーツに関する基礎的研究 (第1報) - 比較教育学の定義と目的について -, 大阪教育大学紀要 第IV部門38-1 : 45-53.
 17. 三村寛一・小坂達彦・佐藤光子・入口 豊 (1989) 大阪市における児童・生徒の体力・運動能力に関する一考察 (第1報) - 小学校児童について -, 大阪教育大学紀要 第V部門 38-1 : 75-85.
 18. 入口 豊 (1989) 比較体育・スポーツ研究方法論に関する筑波ワークショップ, 体育・スポーツ哲学研究11-1 : 71-75.
 19. 田中 譲・田中一郎・入口 豊 (1989) 授業におけるサッカーの効果的指導に関する研究 (第1報) - ボールの種類に着目して -, 大阪教育大学紀要 第V部門38-2 : 297-311.
 20. 三村寛一・小坂達彦・佐藤光子・入口 豊 (1989) 大阪市における児童・生徒の体力・運動能力に関する一考察 (第2報) - 中学校および高等学校生徒について -, 大阪教育大学紀要 第V部門38-2 : 265-273.
 21. 朝井 均・梅田美津子・山下恵美・入口 豊 他2名 (1989) サッカー部・クラブ検診-練習 (運動負荷) 前後における血液生化学的検査値の変動について -, 大阪教育大学紀要 第III部門38-2 : 197-210.
 22. 入口 豊・池田好優・松本大輔・高橋健夫 (1990) 体育科教育実習生の教授技術に関する事例的研究, 大阪教育大学紀要 第V部門39-1 : 95-110.
 23. 朝井 均・入口 豊・渡辺完児・小野興三郎 (1990) サッカー部員における練習負荷前後での血液生化学的検査値の変動について, 臨床スポーツ医学 Vol.7 : 377-380.
 24. 入口 豊・伊達由美・宝学淳郎 (1991) 比較体育・スポーツに関する基礎的研究 (第2報) - H.Haag の比較スポーツ教育学論について -, 大阪教育大学紀要 第IV部門40-1 : 75-85.
 25. 田中 譲・入口 豊 (1991) 授業におけるサッカーの効果的指導に関する研究 (第2報) - 授業形態の違いによる検討 -, 大阪教育大学紀要 第V部門40-1 : 95-112.
 26. 入口 豊 (1992) 問い直される体育教師の専門性, 体育科教育40-6 : 20-22.
 27. 谷 武史・入口 豊・三村寛一・芝田孝人 (1992) 小学校体育授業の効果的指導に関する事例的研究 - V.T.R. を用いた障害走の指導について -, 大阪教育大学紀要 第V部門41-1 : 103-116.
 28. 池田好優・入口 豊・芝田孝人・中野尊志・宝学淳郎 (1993) 英国におけるサッカー・フーリガニズムに関する研究 (I) - サッカー・フーリガニズムの起源と歴史 -, 大阪教育大学紀要 第IV部門 41-2 : 239-251.
 29. 池田好優・入口 豊・芝田孝人・中野尊志・宝学淳郎 (1993) 英国におけるサッカー・フーリガニズムに関する研究 (II) - サッカー・フーリガニズム拡大の背景 -, 大阪教育大学紀要 第IV部門 42-1 : 159-168.
 30. 田中 譲・入口 豊・正田隆博・芝田孝人 (1993) 授業におけるサッカーの効果的指導に関する研究 (第3報) - コートの広さと学習内容の検討 -, 大阪教育大学紀要 第V部門42-1 : 129-139.
 31. 田中 譲・入口 豊・武藤健司 (1994) 授業におけるサッカーの効果的指導に関する研究 (第4報) - 中・高一貫の学習過程について -, 大阪教育大学紀要 第V部門 43-1 : 157-169.
 32. 入口 豊 (1994) ボストン大学のヒューマン・ムーブメントプログラム, 学校体育 47-9 : 40-41.
 33. 入口 豊 (1995) 生涯スポーツと運動教育の理念, 教育ノート (大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校教育研究会) 24-1 : 14-15.
 34. 入口 豊・池田好優・中野尊志・宝学淳郎・芝田孝人 (1995) 英国におけるサッカー・フーリガニズムに関する研究 (III) - 二つの

- 惨事とテイラー・レポートについて-, 大阪教育大学紀要 第IV部門44-1 : 159-168.
35. Yutaka IRIGUCHI (1995) Physical Education or Sport Education : problems concerning the title of P.E. in Japan ; A.I.E.S.E.P. (International Association for Physical Education in Higher Education) K.G.Hawkins & R.Nastasi (edt.) Viewing the Year 2000, Brown & Benchmark Publishers, U.S.A., :127-133.
36. 入口 豊 (1996) ボストン大学のHMプログラムと教育実習, Proceeding of the 2nd Tsukuba International Workshop on Sport Education : 7-14.
37. 平井和代・入口 豊・花谷建次 (1996) Allen Guttman の女性スポーツに関する「三大論争」について (I), 大阪教育大学紀要 第IV部門45-1 : 85-100.
38. 花谷建次・入口 豊・太田順康 (1996) 女子「野球」に関する史的考察 (I) - アメリカ女子ベースボール史-, 大阪教育大学紀要 第IV部門 45-1 : 101-118.
39. 入口 豊 (1996) ボストン大学の体育科教育実習プログラム, 大阪教育大学紀要 第V部門 45-1 : 107-118.
40. Yutaka IRIGUCHI (1996) The Current Status and Problems of Research in International Physical Education and Sport Studies in Japan, Mikio Maeda・Soichi Ichimura・Ken Hardman (ed.), Physical Education and Sport in Japan, International Education and Leisure Studies, Manchester, U.K. : 61-62.
41. 花谷建次・入口 豊・太田順康 (1997) 女子「野球」に関する史的考察 (II) - 日米女子野球史-, 大阪教育大学紀要 第IV部門 45-2 : 289-302.
42. 入口 豊 (1997) 屋外遊びの縮小と学校体育, 学校体育50-5 : 25-29.
43. 平井和代・入口 豊・花谷建次 (1997) Allen Guttman の女性スポーツに関する「三大論争」について (II), 大阪教育大学紀要 第IV部門 46-1 : 81-90.
44. 花谷建次・入口 豊・太田順康 (1997) 女子「野球」に関する史的考察 (III) - 日米女子「野球」の比較と展望-, 大阪教育大学紀要 第IV部門 46-1 : 91-102.
45. 入口 豊 (1998) 学び方学習, 学校体育 51-12 : 38.
46. 的場秀樹・入口 豊 (1999) 「スポーツ教育学」の学的論拠に関する研究 (I) - 特に, スポーツ教育学主張の論拠について-, 大阪教育大学紀要 第IV部門47-2 : 377-394.
47. 的場秀樹・入口 豊 (1999) 「スポーツ教育学」の学的論拠に関する研究 (II) - 特に, 隣接諸科学との関係について-, 大阪教育大学紀要 第IV部門48-1 : 77-91.
48. 井上功一・入口 豊・杉村憲一・吉田雅行 (2000) NCAA (全米大学競技スポーツ協会) の組織と問題点, 大阪教育大学紀要 第IV部門48-2 : 387-399.
49. 入口 豊 (2001) 北米における大学体育学部・学科改革に関する事例的研究, 日本スポーツ教育学会第20回記念国際大会論集 : 161-164.
50. 井上功一・入口 豊 (2001) NCAA (全米大学競技スポーツ協会) に関する一考察, 日本スポーツ教育学会第20回記念国際大会論集 : 195-200.
51. 入口 豊 (2001) 北米における大学体育関連学部改革とカリキュラムに関する事例的研究, 大阪教育大学紀要 第IV部門 50-1 : 183-192
52. 井上功一・入口 豊・太田順康・吉田雅行 (2001) 大学競技スポーツ組織の現状と課題-アメリカ NCAA に焦点をあてて-, 大阪教育大学紀要 第IV部門 50-1 : 193-210.
53. 入口 豊 (2001) アメリカ・カナダにおけるカリキュラム改革の動向(第6章2節: 338-345.), 総括-高等教育機関における体

- 育カリキュラムの現状と課題(第6章6節: 381-385.), 「日本および諸外国の学校体育カリキュラムの現状と課題」(平成11・12年度文部省科学研究費補助金, 基盤研究A 研究成果報告書, 研究代表者:高橋健夫)
54. 馬場裕樹・入口 豊・太田順康 (2002) ドイツにおける地域スポーツクラブの事例的研究 - Niederau サッカークラブの経験を通して -, 大阪教育大学紀要 第IV部門 50-2 : 449-458.
55. 東明有美・入口 豊・山科花恵 (2002) 女子サッカーの日米比較研究 (I) - アメリカ女子サッカーの歴史と現状について -, 大阪教育大学紀要 第IV部門 51-1 : 165-180.
56. チョクト・入口 豊・太田順康 (2002) ブフ (モンゴル相撲) の現代化に関する研究 (I) - 伝統文化としてのブフの形成 -, 大阪教育大学紀要 第IV部門 51-1 : 147-164.
57. 入口 豊・堤 俊彦 (2002) 子どもにおける身体活動: 身体活動の低下と小児肥満の関係, 「身体活動・運動アドヒアランス強化に関する心理・行動科学的研究 - 第1報 -」(平成13年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告, 財団法人日本体育協会スポーツ医・科学研究委員会): 112-116.
58. 三村寛一・入口 豊・安部恵子・鉄口宗弘他3名 (2003) 小学校児童の形態と運動能力および生活習慣について, 「身体活動・運動アドヒアランス強化に関する心理・行動科学的研究 - 第2報 -」(平成14年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告, 財団法人日本体育協会スポーツ医・科学研究委員会): 121-128.
59. 三村寛一・入口 豊・橋本有哉他3名 (2003) ライフレコーダーを用いた小学校高学年における一日の運動量, 「身体活動・運動アドヒアランス強化に関する心理・行動科学的研究」 - 第2報 -」(平成14年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告, 財団法人日本体育協会スポーツ医・科学研究委員会): 129-134.
60. 東明有美・入口 豊・山科花恵・松原英輝 (2003) 女子サッカーの日米比較研究 (II) - 日本女子サッカーの歴史と現状について -, 大阪教育大学紀要 第IV部門 51-2 : 433-451.
61. チョクト・入口 豊・太田順康 (2003) ブフ (モンゴル相撲) の現代化に関する研究 (II) - 近代文化としてのブフの展開 -, 大阪教育大学紀要 第IV部門 51-2 : 471-484.
62. 蓬野弘幸・入口 豊 (2003) アメリカの大学における体育科教員養成の現状に関する研究 (I) - アメリカにおける教員免許状制度について -, 大阪教育大学紀要 第IV部門 51-2 : 453-469.
63. 入口 豊・蓬野弘幸 (2003) アメリカの大学における体育科教員養成の現状に関する研究 (II) - 体育学部・学科の位置付けと教員養成プログラムについて -, 大阪教育大学紀要 第IV部門52-1 : 161-174.
64. 蓬野弘幸・入口 豊 (2003) アメリカの大学における体育科教員養成の現状に関する研究 (III) - 大学における体育科教員養成プログラムの事例 -, 大阪教育大学紀要 第IV部門52-1 : 175-193.
65. 山科花恵・入口 豊 (2006) サッカー競技とジェンダーに関する一考察, 大阪教育大学紀要 第IV部門54-2 : 175-193.
66. 志賀泰彦・入口 豊・井上功一 (2006) アメリカ合衆国の中等学校における体育カリキュラムについて (I) - Wiiigoose, C. E. & Stillwell, J.L. "the Physical Education Curriculum" を中心に -, 大阪教育大学紀要 第V部門第54-2 : 45-63.
67. 入口 豊 (2006) 特集 日本人とスポーツ, 東芝インターネットサイト「あれきてる」, 全4回連載 : 1-8.
68. 志賀泰彦・入口 豊・井上功一 (2006) アメリカ合衆国の中等学校における体育カ

- リキュラムについて (II) - 体育カリキュラムモデルについて -, 大阪教育大学紀要 第V部門55-1 : 76-96.
69. 松原英輝・入口 豊・中野尊志・西田裕之・中村泰介(2006) フランスの青少年サッカー選手育成システムに関する研究 (I) - 若年層における選手育成システムの現状と特徴 -, 大阪教育大学紀要 第IV部門55-1 : 1-20.
70. 志賀泰彦・入口 豊・井上功一 (2007) アメリカ合衆国の中等学校における体育カリキュラムについて (III) - 体育プログラムの実践例 -, 大阪教育大学紀要 第V部門55-2 : 79-93.
71. 松原英輝・入口 豊・中野尊志・西田裕之・中村泰介(2007) フランスの青少年サッカー選手育成システムに関する研究 (II) - 国立サッカー学院 (I.N.F) の現状及び特徴 -, 大阪教育大学紀要 第IV部門55-2 : 27-44.
72. 入口 豊 (2007) 教員養成系大学大学院レベルの体育教師教育と教育実習に関する国際比較研究, 2005・2006年度科学研究費補助金 (基盤研究C) 研究成果報告書 (研究代表者: 入口 豊): 1-102.
73. 入口 豊 (2007) 全日本女子サッカー選手権 - 第1回大会開催 - 1980.3 (連載スポーツタイムマシン6), 体育科教育 55-3 : 64-65.
74. 郭 殿祥・入口 豊・太田 順康 (2007) 中国における体育教員養成の歴史と現状 (I) - 体育教員養成の歴史について -, 大阪教育大学紀要 第IV部門56-1 : 27-38.
75. 郭 殿祥・入口 豊・太田 順康 (2008) 中国における体育教員養成の歴史と現状 (II) - 体育教員養成カリキュラムの現状について -, 大阪教育大学紀要 第IV部門56-2 : 43-52.
76. 日高弓雅・千住真智子・入口 豊 (2008) 舞踊の「フロア」に関する研究 (I) - フランスで活動する舞踊家の現状と楽しさについて -, 大阪教育大学紀要 第IV部門56-2 : 73-91.
77. 入口 豊 (2008) カンタベリー大学教育学部 (NZ) の体育教員養成カリキュラム, 大阪教育大学紀要 第IV部門57-1 : 39-55.
78. 入口 豊・齋藤 覚・稲森あゆみ・一原悦子・屋麻戸 浩 (2009) 大阪市における児童の屋外遊びの実態に関する経年比較研究 (I) - 特に, 遊び時間と遊び場について -, 大阪教育大学紀要 第IV部門57-2 : 53-67.
79. 長澤由季・入口 豊 (2009) 視覚障害者サッカー (Blind Football) の現状と展望 (I), 大阪教育大学紀要 第IV部門 57-2 : 69-82.
80. 福井哲史・鉄口宗弘・入口 豊 (2009) 大学サッカー選手における下肢のケガ発生と身体特性との関連について, 大阪教育大学紀要 第IV部門 57-2 : 113-122.
81. 松原英樹・入口 豊・吉田雅行・吉田康成 (2009) フランスのサッカー選手育成の現状について - 育成年代における一貫指導体制の現状と特徴 -, 大阪教育大学紀要 第IV部門 57-2 : 241-258.
82. 長澤由季・入口 豊・井上功一・中野尊志 (2009) 視覚障害者サッカー (Blind Football) の現状と展望 (II), 大阪教育大学紀要 第IV部門 58-1 : 39-52.
83. 入口 豊・齋藤 覚・稲森あゆみ・一原悦子・屋麻戸 浩・井上功一 (2009) 大阪市における児童の屋外遊びの実態に関する経年比較研究 (II), 大阪教育大学紀要 第IV部門58-1 : 7-22.
84. 鉄口宗弘・福井哲史・入口 豊・三村寛一 (2009) 大学サッカー選手におけるキックスピードと身体特性との関連について, 大阪教育大学紀要 第IV部門58-1 : 119-128.
85. 入口 豊・井上功一 (2009) フィンランドの体育カリキュラム改革 (I), 大阪教育大学紀要 第IV部門 58-1 : 57-68.
86. 入口 豊・井上功一 (2010) フィンランドの体育カリキュラム改革 (II), 大阪教育

- 大学紀要 第Ⅳ部門 58-2 : 65-75.
87. 古本智大・入口 豊・井上功一・中野尊志・大西史晃 (2010) フットサル普及の現状と展望 (Ⅰ), 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 58-2 : 35-52.
88. 東 庸介・鉄口宗弘・難波康太・福井哲史・池谷茂隆・入口 豊・三村寛一 (2010) 大学生サッカー選手における栄養摂取状況について, 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 58-2 : 89-97.
89. 古本智大・入口 豊・井上功一・中野尊志・大西史晃 (2010) フットサル普及の現状と展望 (Ⅱ), 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 59-1 : 27-42.
90. 佐々京香・入口 豊・輪田真理・山科花恵 (2010) 女性の職業としての体育教師に関する事例的研究 (Ⅰ), 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 59-1 : 13-26.
91. 井上功一・入口 豊・大久保 悟 (2010) 日本の大学競技スポーツ組織に関する一考察, 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 59-1 : 1-12.
92. 古本智大・入口 豊・井上功一・中野尊志・大西史晃 (2011) フットサル普及の現状と展望 (Ⅲ), 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 59-2 : 61-72.
93. 佐々京香・入口 豊・輪田真理・山科花恵 (2011) 女性の職業としての体育教師に関する事例的研究 (Ⅱ), 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 59-2 : 49-59.
94. 佐々京香・入口 豊・輪田真理・山科花恵 (2011) 女性の職業としての体育教師に関する事例的研究 (Ⅲ), 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 60-1 : 21-31.
95. 井上功一・入口 豊・横山和伸 (2011) 小学校体育の授業開始15分でできる体力向上プログラムの開発 (Ⅰ), 大阪教育大学紀要 第Ⅴ部門 60-1 : 17-25.
96. 大松敬子・田中 譲・入口 豊 (2011) バランスボールを使った「体づくり運動」における主体的な取り組みの実践: 女子高校生を対象に, 大阪教育大学紀要 第Ⅴ部門 60-1 : 27-38.
97. 輪田真理・入口 豊・井上功一・山科花恵・東明有美 (2012) 日本女子サッカーリーグ所属クラブの現状と展望 (Ⅰ) - 日本女子サッカー (なでしこ) リーグの歴史と現状 -, 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 60-2 : 15-28.
98. 輪田真理・入口 豊・井上功一・山科花恵・東明有美 (2012) 日本女子サッカーリーグ所属クラブの現状と展望 (Ⅱ) - 浦和レッドダイヤモンズ・レディースに焦点を当てて -, 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 61-1 : 19-32.
99. 大松敬子・田中 譲・入口 豊 (2012) 生涯にわたる実践を目標にした高校女子生徒を対象とした「体づくり運動」- ボールエクササイズを用いて -, 大阪教育大学紀要 第Ⅴ部門 61-1 : 73-85.
100. 大松敬子・田中 譲・入口 豊 (2013) : 生涯にわたる実践を目標にした高校女子生徒を対象とした「体づくり運動」(Ⅱ) - 高校1年生を対象としたボールエクササイズのカリキュラム -, 大阪教育大学紀要 第Ⅴ部門 61-2 : 35-45.
101. 輪田真理・入口 豊・井上功一・山科花恵・東明有美 (2013) 日本女子サッカーリーグ所属クラブの現状と展望 (Ⅲ) - 「伊賀フットボールクラブ・くノ一」に焦点を当てて -, 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 61-2 : 25-39.
102. 内藤翔平・入口 豊・井上功一・中野尊志・大西史晃 (2013) イングランドのサッカークラブにおけるユース育成について (Ⅰ) - イングランドのユース育成システム -, 大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門 61-2 : 11-24.
103. 内藤翔平・入口 豊・井上功一・中野尊志・大西史晃 (2013) イングランドのサッカークラブにおけるユース育成について (Ⅱ) - ウィンブルドンFCについて -,

- 大阪教育大学紀要 第IV部門 62-1 : 31-42.
104. 鉄口宗弘・叢 晨・入口 豊・三村寛一・高橋哲也 (2013), バスケットボールのフリースローにおける上肢動作について, 大阪教育大学紀要 第IV部門62-1 : 145-153.
105. 叢 晨・三村寛一・高木信良・入口 豊・鉄口宗弘 (2013) 大学生スポーツサークルの運営に関する日中比較研究, 大阪教育大学紀要 第IV部門 62-1 : 133-144.
106. 陰田隼貴・入口 豊・上野大樹・ベネット・ブレイク (2014) 反省的実践家としてのスポーツコーチに関する研究 (I), 大阪教育大学紀要 第IV部門 62-2 : 23-35.
107. 佐藤慶明・入口 豊・西島吉典 (2014) 我が国のプロサッカークラブの経営に関する事例的研究 (I) - J1「浦和レッドダイヤモンズ」を中心に -, 大阪教育大学紀要 第IV部門 62-2 : 11-22.
108. 陰田隼貴・入口 豊・上野大樹・ベネット・ブレイク (2014) 反省的実践家としてのスポーツコーチに関する研究 (II), 大阪教育大学紀要 第IV部門 63-1 : 33-44.
109. 佐藤慶明・入口 豊・西島吉典 (2014) 我が国のプロサッカークラブの経営に関する事例的研究 (II) - J2「徳島ヴォルティス」を中心に -, 大阪教育大学紀要 第IV部門 62-2 : 11-22.
110. 中野尊志・西田裕之・井上功一・入口 豊 (2014) イングランドにおけるフットボール報道に関する史的研究 (I) - 1888年 "Athletic News" 紙の一面記事にみる Football League 報道を中心に -, 大阪教育大学紀要 第IV部門 63-1 : 55-64.
111. 中野尊志・西田裕之・井上功一・入口 豊 (2014) イングランドにおけるフットボール報道に関する史的研究 (II) - 1888年 "Athletic News" 紙のフットボール界の収入・支出に関わる報道を中心に -, 大阪教育大学紀要 第IV部門63-1 : 55-64.
112. 入口 豊 (2014) 比較体育科教育学への招待, 体育科教育; 大修館書店 62-9 : 10-

- 13.
113. 入口 豊 (2014) 「文武両道」に思う, 日本体育学会「体育哲学専門領域会報」巻頭言18-3 : 1-2.
114. 中野尊志・西田裕之・井上功一・入口 豊 (2015) イングランドにおけるフットボール報道に関する史的研究 (III) - Football League 草創期 (1888・1889・1890年) における "Athletic News" 紙報道を中心に -, 大阪教育大学紀要 第IV部門 64-1 : 45-54.
115. 入口 豊 (2019) UNIVAS - NCAA - 「現代スポーツへの警告」, 日本体育学会「体育哲学専門領域会報」巻頭言21-3 : 1-2.

VI. 教育雑誌「教育PRO」(ERP) 連載コラム

- 入口 豊 (全て単著, 2015年9月～)
- 題目
1. ブームから文化へ (45-21 : 19, 2015. 9. 15.)
 2. 「文武両道」について (45-25 : 11, 2015. 11. 17.)
 3. 「文武両道」について (2) (46-2 : 23, 2016. 1. 26.)
 4. ノーサイド (46-7 : 23, 2016. 3. 15.)
 5. ヤンチ先生 (46-11 : 23, 2016. 5. 17.)
 6. ヒーローになる時 (46-16 : 23, 2016. 7. 19.)
 7. アンチ・ドーピングとオリンピック教育 (46-21 : 23, 2016. 9. 20.)
 8. 運動のヴォキャブラリー (46-25 : 23, 2016. 11. 15.)
 9. 名将エディー・ジョーンズ監督の言葉 (47-4 : 23, 2017. 2. 21.)
 10. 良い体育授業と四大教師行動 (47-10 : 23, 2017. 4. 18.)
 11. 体育かスポーツか (47-14 : 23, 2017. 6. 20.)
 12. アートとサイエンス (47-18 : 23, 2017. 8.

- 15.)
13. 日本人とスポーツ (47-23:23, 2017. 10. 17.)
14. イギリス型スポーツとアメリカ型スポーツ (47-28:23, 2018. 12. 19.)
15. I (アイ) リーグ～学生サッカー連盟の画期的改革～ (48-6:23, 2018. 3. 6.)
16. 主将の役割 (48-10:23, 2018. 5. 11.)
17. ゴール型ゲームの特徴:「オープン」と「クロード」 (48-15:17, 2018. 7. 3.)
18. 大学スポーツの課題 (48-20:17, 2018. 9. 4.)
19. タイトルIX (ナイン) (48-24:23, 2018. 11. 6.)
20. 高校サッカーのPK戦 (49-1:33, 2019. 1. 15.)
21. 子どもの遊びの変容 (49-6:19, 2019. 3. 5.)
22. 遊びと体育:似て非なるもの (49-10:19, 2019. 5. 21.)
23. 荷物が重いんじゃない, 力が足らんのか (49-15:21, 2019. 7. 2.)
24. UNIVAS - 日本版 NCAA (49-20:21, 2019. 9. 3.)
25. NCAA 収益増大の秘密:「4年ルール」 (49-24:21, 2019. 11. 5.)
26. 「ワンチーム」のキャプテンシー (50-1:21, 2020. 1. 21.)
27. オリンピック (オリンピック) (50-6:21, 2020. 3. 3.)
28. 異色の経歴:消防士から医師に (50-10:21, 2020. 6. 19.)
29. 異国に暮らす:有意義な海外留学 (50-15:20, 2020. 10. 20.)

継続中

VII. 「比較体育科教育学への招待」

入口 豊

(「体育科教育」2014年9月号掲載元原稿)

はじめに

近年の我が国の現状を見ると、「グローバル化」は教育界においても重要なキーワードとなり、小学校における英語教育の必修化を含めその波は急速に広がっており、体育・スポーツ分野の国際化、情報化の進展は、筆者らの年代が研究者の卵として出発した約40年前の時点と比べても目を見張るものがある。その当時、近代スポーツ発祥の地への憧れから無謀にも戦後のイギリス公立学校の体育カリキュラムの研究に着手した筆者は、我が国においてイングランドの最上位階層5%未満の家庭の生徒のみが通う「高級私立校であるパブリック・スクール」の体育の情報は紹介されているものの、それ以外の英国一般公立中等学校の体育の実情に関する資料がほとんど無いことに気付き、無我夢中で英文原著文献・資料を国内外からかき集めて翻訳作業に悪戦苦闘した経験がある。そして、その時に思い知らされたのが、外国の体育事情を比較研究する前提として、まずはその国の政治、経済、教育制度等を十分に把握しておく必要があるという極めて基本的な命題であった。

その後、体育・スポーツ事象の国際比較研究を主テーマに研究を進めていく上で、親学問に当たる比較教育学を学ぶために教育学の学部学生と共に比較教育学の講義を受講し、それをきっかけに「日本比較教育学会」に入会して以来今日に至っている。

比較体育学, 比較スポーツ教育学

1970年当時に創設された「国際比較体育・スポーツ学会」(ISCPES)のリーダーでもあった西ドイツ(当時)の研究者ハーグ(Haag, H.)は、比較スポーツ教育学(Comparative Sport Pedagogy)を教育科学、スポーツ教育学の重要な一分野と位置づけている。彼は、1980年代当時の体育・スポーツ分野の国際比較研究について、「その研究成果は充分にはあがっておらず、『比較』を冠しながらそれに値しない研究も数多くあり、比較研究法の基準に合致しないにもかかわらず比較という

標題を付けた研究をよく見かける」と述べ、諸外国の体育・スポーツ事象の記述のみに終始する「外国体育学」と比較教育学で一般化している「比較の四段階」（記述—解釈—並置—比較）の第四段階にあたる真の「比較」を目指す「比較体育学、比較スポーツ教育学」とを明確に区別すべきであることを主張していた。

このハーグの「比較体育学」、「比較スポーツ教育学」に関する諸論文の内容については既に拙著論文において発表しているので詳述は避けるが、筆者は「グローバル化」が急速に進展する現在においても、この観点はなお重要であると考えている。

親学問 (mother discipline) としての「比較教育学」

世界的にも著名な比較教育学者レ・タン・コイ (1991) は、『『比較』』についていえば、その目的は二つの事象あるいは、二つの制度のあいだの類似点と相違点を引き出し、分析し、説明することである。相違点と類似点は、当然のことながら、それに対応した対象に、しかもグローバルな文脈のなかに位置づけ直された対象に、結びつけられなければならない。」としている。

石附 (2001) は、「これまでの日本における比較教育学研究の特徴は、筆者の見るところ、どちらかといえば、『比較』研究より『地域』研究の方が圧倒的に多く、換言すれば、『比較教育学』より『外国教育学』としての性格が強かったように思う。」と述べ、日本の比較教育学界全体に反省を促し、さらには国際的動向から勘案して「比較教育学」から「比較・国際教育学」へと発展させるべきである主張している。そこで強調されるのは、『『比較』』にあっても『国際』』にあっても、研究者自ら属する国つまり自国の教育についてしっかりとした認識を持っていることが、なによりも大切だ」という点である。

また、沖原 (1982) は、比較教育学の目的

として、「自国の教育の特性の把握」、「教育改革への寄与」、「教育の法則性の探究」の三点をあげている。単なる海外紀行、外国紹介に終わるのではなく、前述のハーグが指摘した「外国体育学」以上の「比較体育学」を目指すことと、自国の教育についてしっかりとした認識を持って、最終的には「自国の体育科教育に寄与する」ための知見を得ることが重要である。

教育風土の違い (日米)

矢野 (2001) は、「教育の地方分権が徹底しているアメリカの場合、州および全米で一萬五千を超える学区 (school district) ごとに教育の様相はずいぶん異なる。カリキュラムの概要について州の教育法で規定されている場合でも、その内容はごく大まかなものである。とくに小学校段階では、個々の学校、そして教師の自由裁量の余地が大きい。したがって、学習指導要領によって全国一律に履修させる教科とそれに充てる授業時数が厳格に定められている日本とはたいへん異なる。」と述べているが、筆者自身のアメリカ留学体験からもその実感が強い。1990年代後半に施行されたアメリカの「教科別ナショナル・スタンダード」も、日本の学習指導要領ほどの全米に亘る浸透力は持っていないと考えられる。結論から言えば、一言で、アメリカの教育・体育事情を語ることは困難であり、アメリカの小・中・高校及び大学の体育・スポーツ事情の報告も、あくまで特定の地域、特定の学校の事例的なものと捉える慎重さが必要である。

逆に、日本の教育事情、体育事情を説明するには、学習指導要領を外国語に翻訳すればほぼ事足りるとと思われる程信頼性が高いと言える。Uwe Pühse 等 (2005) は、近年の世界35カ国の体育事情を国際比較した書物を出版しているが、筆者は本書において筑波大学の岡出美則氏が英文で記述している日本の体育の現状 (2005年当時) は、記載されたその他

の34カ国の体育事情の中でも最も信頼性が高いと考えている。加えて、体育科の授業研究の面でも、この「体育科教育」誌のような民間の全国的啓蒙誌の存在も含め、教員同士がこれ程熱心にしかもきめ細かに体育科の授業研究を進めている国は少ないと言える。

翻訳の注意点

筆者は分担翻訳者として過去に数冊の英語文献の翻訳を執筆したが、正確に翻訳するためには多くの困難と危険性があることも多々経験してきた。例えば、athletic という言葉は、アメリカでは競技スポーツの意味で使われ、陸上競技は Track & Field であるが、イギリスの陸上運動の教材名は athletics である。また、movement education は、日本の翻訳書では、「運動教育」「動きの教育」「ムーブメント教育」等の訳語が充てられ、運動にあたる英語は、movement, exercise, motor など様々である。さらに、「日本体育協会」の英語名が Japan Sports Association、アメリカの NCAA (National Collegiate Athletic Association) の翻訳語が「全米大学体育協会」等々、体育とスポーツの概念すら曖昧のまま使用している。幾つもの翻訳語の充当が考えられる際には、せめてカッコ内に英語の原語を記入してほしいものである。

輸入から輸出の時代へ

この20年間の日本の競技スポーツ界の海外進出には目を見張るものがある。「ベースボールと野球道」に代表されるように、かつてあった日本の野球と本場アメリカのベースボールの比較が嘘のように、1990年代の野茂投手の渡米から始まった日本人選手のメジャー移籍者数は今や50人を超え、その活躍からも日米野球の壁がもはや過去のものであることを証明しているし、サッカー界では、Jリーグ発足以来、香川、長友、本田のように英国の古豪マンチェスター・ユナイテッドやイタリアのミランで活躍する選手が出るなど、まさか漫

画「キャプテン翼」の世界の夢物語が現実のものになるとは筆者のようなサッカー関係者ですら想像できなかったことである。

筆者は、2000年当時、拙著論文(2000)の最後に次のように記している。「筆者個人の海外在住・渡航経験からみても、日本ほど海外のスポーツ情報に明るく、洋の東西に関係なくあらゆる種類のスポーツが普及している国はめずらしく、体育・スポーツの研究分野においても、あらゆる言語圏の情報をもっているという点、すなわち海外の『情報の収集・輸入』の面では世界でもトップクラスあると言ってよいであろう。恐らく、日本の体育学界のどの分野の研究者も、海外から全く未知のことを一方的に学ぶということは少なくなつたし、海外から取り入れた情報を自分達独自に加工、修正しながら優れた研究成果をあげている例は、人文・社会・自然科学のすべての分野に数多く認められる。近年、国際シンポジウムの開催や国際学会での発表の機会が急速に増えてきたとはいえ、まだまだ優れた研究成果の大部分が国内に眠っていると考えるのは筆者だけではあるまい。その意味からも、我が国の体育学・スポーツ諸学の研究者は、来るべき21世紀を『研究の成果を外国語で公表し、世界の人々とのコミュニケーションに努力すべき』、『情報の加工・輸出の時代』の到来と位置づけるとともに、正に比較に値する質の高い国際比較研究を目指して研鑽すべきであろう。」

おわりに

それから14年経った今でもその考えに変わりはなく、欧米諸国を先進国として追いかける輸入の時代は終わり、もはや輸出に転じる時期到来である。筆者は、3年前に中国・長春市の小学校体育担当教員を対象に行った講演会で、日本の体育授業のDVD映像を見せたところ、長春市の教員達が日本の授業の斬新さに驚き、何度も何度も再映を迫られ、質問責めにあった経験がある。日本の小学校教

員が基本的には全教科を担当し、体育科はその中の1科目にすぎないことにも驚きを隠せないようであった。

最後に、「中学教員を対象にした経済協力開発機構(OECD)の2013年の『国際教員指導環境調査』では、日本の教員の勤務時間は週53.9時間と最長(参加34カ国・地域平均は38.3時間)で、事務作業や部活動指導の時間が参加国平均に比べ3～2倍長かった。」(毎日新聞, 2014年7月17日朝刊)とされ、国の教員に対する待遇改善策は急務であるが、世界トップクラスの我が国の学校体育授業の水準は、国際的にも最も厳しい環境下にある日本の先生方の昼夜を惜しまぬ献身的な努力によって支えられていることを忘れてはならない。

文 献

- Haag, H. (1986) "Comparative Sport Pedagogy - Comparative Education: A Basic Intrarelationship Within Educational Sciences, International Society for Comparative Physical Education and Sport, Comparative Physical Education and Sport Vol. 3, Human Kinetics, PP. 33-48.
- 入口 豊 (2000) スポーツ科学・スポーツ教育学の発展と比較スポーツ教育学(Comparative Sport Education)の課題, 近藤英男・高橋健夫他編『新世紀スポーツ文化論』(体育学論叢4) タイムス
- 入口 豊 (1989) 比較体育・スポーツに関する基礎的研究(第1報)ー比較教育学の定義と目的についてー, 大阪教育大学紀要, 第IV部門, 38-1, PP. 45-53.
- 入口 豊 (1989) 比較体育・スポーツ研究方法論に関する筑波ワークショップ, 体育・スポーツ哲学研究, 第11巻第1号, PP. 71-75.
- IRIGUCHI Yutaka (1996) "The Current Status and Problems of Research in International Physical Education and Sport Studies in Japan", Mikio Maeda, Soichi Ichimura and Ken Hardman (ed.), Physical Education and Sport in Japan, International Education and Leisure Studies, Manchester, U.K., pp.61-62.
- レ・タン・コイ (1991) 前平泰志他訳 比較教育学: グローバルな視座を求めて, 行路社
- 沖原豊編 (1982) 比較教育学 有信堂
- 石附 実編著 (2001) 比較・国際教育学(補正版), 東信堂
- Uwe Pühse, & Markus Gerber (Eds.) (2005), International Comparison of Physical Education: Concepts · Problems · Prospects, Meyer & Meyer Sport (UK)
- 矢野裕俊 (2001) カリキュラムの比較ーアメリカ・イギリスと日本, 石附 実編著 前掲書